

富山県美術館

紀要（令和2年度）

Bulletin of Toyama Prefectural Museum of Art and Design
No.2 2020.4－2021.3



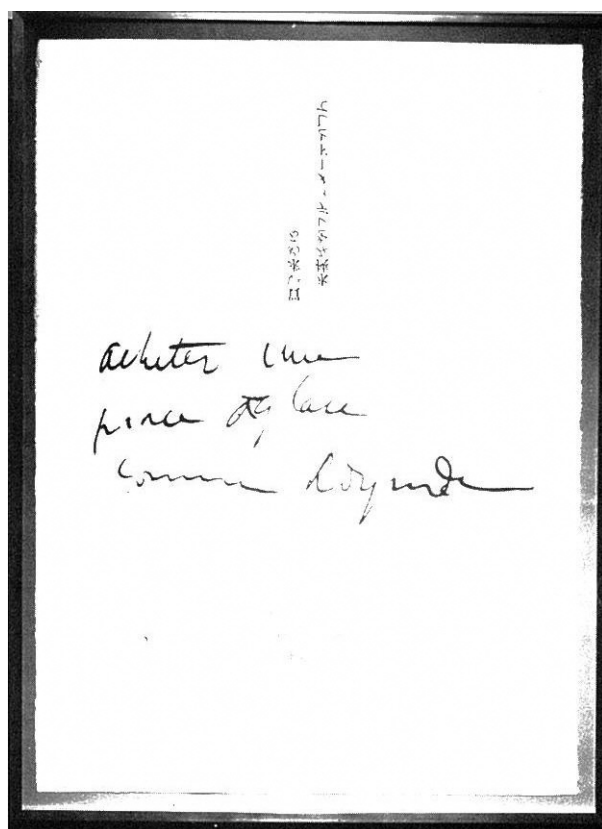
1. マルク・シャガール《山羊を抱く男》1924-25年頃
富山県美術館蔵



2. ジュ・ド・ポーム美術館 第15室(「殉教者の部屋」)展示風景



3. 「デュシャンの書斎で、東野芳明氏と(ジャン・ティンゲリー撮影)」
『美術手帖』1968年3月号 p. 77掲載



4. 東野芳明《氷挟みをレディメードとして買い求める》
『これは本ではない』(エディションエパーヴ、1975年)p. 45掲載

目次

マルク・シャガール《山羊を抱く男》 —ナチス政権下のフランスにおける美術品接収と返還をめぐって— 碓井 麻央（普及課 学芸員）	6
---	---

資料紹介 東野芳明旧蔵マルセル・デュシャン関連書籍・ノート 遠藤 亮平（普及課 主任）	12
---	----

マルク・シャガール《山羊を抱く男》

―ナチス政権下のフランスにおける美術品接収と返還をめぐる―

学芸員 碓井 麻央

1. はじめに

当館所蔵作品であるマルク・シャガール《山羊を抱く男》(1924-25 年頃) [口絵 1] は、シャガールがパリで生活した時代の油彩作品である。当館の前身にあたる富山県立近代美術館が 1980 年 3 月に購入し、1981 年の開館以来、重要なコレクションのひとつとして親しまれてきた¹。しかし本作が第二次世界大戦下でナチス・ドイツに接収され、戦後返還された作品の 1 点であったということは、これまで当館で紹介されることのなかった事実である。この来歴は当館収蔵時には知られておらず、ナチスの略奪美術品のデータベースの公開により明らかになった²。なお当館は、同様にナチスによる接収を受けた作品として、藤田嗣治(レオナルド・フジタ) 作の《二人の裸婦》(1929 年) を所蔵している³。

本稿では、ERR のデータベースおよびその情報元であるアメリカ、フランス、ドイツの 3 国のアーカイブ資料に基づき、戦時下に本作がたどることになった歴史的経緯を整理する⁴。それを通して、第二次世界大戦下においてシャガール作品がどのような存在としてみなされたか、そしてナチス政権下で当時の個人コレクションがどのように取り扱われたかの一端を明らかにすることを目的とする。

2. 作品について

(1) 《山羊を抱く男》について

はじめに、本作の概要について確認していきたい。作品中央には、帽子をかぶり長いひげをたくわえた男性が、山羊を抱いた姿で描かれている。背後には木造の家屋とその戸口にたたずむ女性、さらに後景には十字架を頂く教会が見える。これらの人物と風景は、シャガールの故郷ヴィテブスクのものである。

作者の娘のイダ・シャガールは後年、本作について、フランツ・マイヤーの編纂したカタログ⁵のうち、1924 年から 25 年にかけて制作された厚塗りによる絵画群である No. 370 から 376 の間に該当する作品と証言している [資料 1]。すなわち本作は、1923 年からのシャガール 2 度目のパリ滞在中の作にあたる。幾度も厚く塗り重ねられた画面には、山羊の口元の形など 4 カ所に大きな修正が加えられた形跡や、古いサインの痕跡が確認されており、制作過程で試行錯誤を経て完成した作品とみられる⁶。

木造の家屋やユダヤ教の教会(シナゴグ) は、彼が故郷の風景を描く際にしばしば用いたモチーフである。これは、第一次世界大戦・ロシア革命のさなかに書き進められ、1922 年より銅版画集の制作も進められたシャガールの自叙伝『わが回想』の挿絵に用いられた生家の描写とも通じている。また、つば付きの帽子をかぶった姿は、シャガール自身の家族をはじめ、故郷のユダヤ系の人物を描く際の典型的な表現であった。すなわち本作は、故郷の人々・生活・宗教を、1 枚の絵画に収めた作品と解釈することができる。このような主題は、自身が「記録」と呼んだ作品群である 1914-15 年頃のヴィテブスク・シリーズをはじめ、ロシアを離れた最初のパリ滞在以降に繰り返し描かれることになる。加えて 1920 年代は、本作と同時期の 1924-25 年にかけて制作された、ニコライ・ゴーゴリ『死せる魂』に基づく版画作品や、イディッシュ文化圏の知人との文通や交流にみられるように、故郷の表象や文化との接触が色濃く表れる時期でもあった。

(2) ナチス政権下におけるシャガール

1930 年代のナチス・ドイツの台頭から第二次世界大戦にかけて、シャガール作品はどのように扱われていたのだろうか。

ドイツ国内ではヨーゼフ・ゲッベルスが中心となり、「退廃芸術」(Entartete Kunst) の規制と弾圧が推進される。弾圧対象となったのは、ドイツ帝国にそぐわないとみなされた表現主義、新即物主義、抽象絵画等のモダンアート、およびユダヤ系やスラブ系の出自を持つ画家の作品であった。1930 年代には、弾圧は厳しさを増していく。ユダヤ系の人々の公職からの追放、1936 年の芸術批評の禁止に続き、1937 年には「ドイツ帝国あるいは地方自治体が所蔵する 1910 年以降のドイツの退廃芸術作品―絵画および彫刻―を展覧会用に選定・確保する」命令が下される⁷。この際にドイツ全土の美術館から押収された数百点の作品は、1937 年 7 月にミュンヘンで開かれた「退廃芸術展」に展示された。シャガールについても、ユダヤ系の出自をもち、なおかつアヴァンギャルドの画家でもあることから、作品は「退廃芸術」として押収された。退廃芸術展においてシャガール作品は、ユダヤ人画家による作品が集められた第 2 室で展示されている。退廃芸術展の開幕から数週間後には、国内の公立美術館に対してさらに大規模な撤去命令と押収が進められ、最終的に押収された作品は 1 万 6000 点近くに及ぶ⁸。

当時フランスを拠点としていたシャガール自身は、1937 年にはフランスの市民権を獲得する(その後 1941 年に無効扱いとなる)。しかし、ユダヤ人弾圧の高まりから逃れるため、ニューヨーク近代美術館からの招聘を受け、1941 年にアメリカへ亡命、ニューヨークを活動拠点とすることになる。

3. 第二次世界大戦下における本作の接収

(1) ERR による接収と返還

ナチス占領下のフランスで美術品の略奪活動の中心となったのは、ローゼンベルク特捜隊 (Einsatzstab Reichsleiter Rosenberg、略称 ERR) であった。これはナチス政権下で外務局の局長を務めたアルフレッド・ローゼンベルクの指揮のもと、文化的資産の接収を行った組織である。接収の対象となったのは、ユダヤ人やフリーメイソン会員ら、ナチス政権が「敵」とみなした人々が所有する美術品や書籍、記録文書等であった。ERR の活動によって、公的な美術館のコレクションだけでなく、私的財産である個人コレクションにまで手が及ぶことになる。ローゼンベルクの指揮下にある一方で、ERR に対して実質上の強い影響力を発揮したのは、美術品蒐集で知られる元帥ヘルマン・ゲーリングであった。ゲーリングの意向で絵画や版画等の美術作品のみならず、アンティークの家具やタペストリー等の室内装飾品も接収の対象となったほか、ドイツへと送られる作品の選別も行われることになる。

フランスで ERR が活動を開始したのは、ナチス・ドイツによる侵攻後の 1940 年 6 月から 7 月初旬のことである⁹。その後 1944 年の 8 月までに、フランスとベルギーで 200 件以上のユダヤ系個人コレクションを没収している。詳細は後述するが、これらの作品はパリのドイツ大使館とルーヴル美術館、のちにはジュ・ド・ポーム美術館に集められ、リスト化して管理された。ヒトラーやゲーリングらナチス指導者の美術コレクションに加えられた作品もあったが、多くは売却により資金源となっている。これらの作品は選別を経てドイツに護送され、ノイシュヴァンシュタイン城を含む 6 つの保管庫に移送された。また、いわゆる「退廃芸術」の烙印を押された作品 500 点以上は ERR により破壊対象として記録されたが、実際に何点が破壊処分を受けたのかは明らかではない。第二次世界大戦後は、すでに国外に売却された作品を含めて、元の所有者の搜索と作品の返還が進められていくこととなる。

(2) チェコスロヴァキア大使シュテファン・オススキー

《山羊を抱く男》の旧所蔵者であるシュテファン・オススキー (Štefan Osuský, 1889-1973) もまた、第二次世界大戦中に ERR によりコレクションを奪われたひとりであった。オススキーは 1921 年より在仏チェコスロヴァキア共和国大使を務めた人物で、チェコスロヴァキア共和国崩壊後には亡命者グループの一員となり活動した政治家としても知られている。美術愛好家であったオススキーは、同時代美術を中心とするコレクションを所有していた。第二次世界大戦後に作成された文化財返還請求リスト [資料 2] には、アンドレ・ドラク、モーリス・ド・ヴラマンク、オトン・フリエスらフォーヴィスムの画家や、チェコ出身のフランティšek・クプカやオタカル・クビン、モーリス・ユトリロやシャイム・スーティンらエコール・ド・パリの画家たちの作品が記載されている。その中には彼らの手による自身や妻の肖像画も数多く含まれており、有力なコレクターでありパトロン的な存在であったことがうかがえる。

チェコスロヴァキアの文化政策の面でも、オススキーはフランス美術に通じた人物として重要な役割を担っていた。1923 年から 30 年代にかけて、同国政府はフランス美術の展覧会開催や作品購入を進めるが、オススキーは其中で主導的な役割を果たしたひとりであった。1931 年にチェコスロヴァキアの芸術協会 (Umělecká Besada) が開催した大規模な「エコール・ド・パリ」展でカタログ序文の執筆を任されたことも、その一例と言えるだろう¹⁰。

イダ・シャガールの手紙 [資料 1] によれば、オススキーとシャガールの間には親しい交流があった様子が見受けられる。両者の最初の接点は明らかではないが、先述のチェコスロヴァキア政府の活動に関連して交流があった可能性が考えられる。シャガールの作品は、オススキーが序文を寄せた「エコール・ド・パリ」展に展示されており、同展出品作の《サーカス》(1927 年) はのちにチェコスロヴァキア政府が購入している¹¹。同国政府がフランス美術の紹介と収集に重点を置いた 1920-30 年代は、シャガールがパリで活動した期間、そして《山羊を抱く男》の制作年代とも重なる。本作に関しては、1934 年にプラハで開かれた展覧会¹²に出品されていることから、少なくともそれ以前にはオススキーの所蔵となっていたとみられる。

その後、1938 年から 39 年にかけてチェコスロヴァキア共和国の分割および占領が進められ、1939 年 3 月には完全に解体することとなる。この時オススキーは、政治家で美術コレクターとしても知られるジェームス・アルマン・ド・ロスチャイルドの屋敷に美術コレクションを預けている。大使としての立場を追われ、レジスタンスに加わっているオススキーは、フランスでの立場は当然ながら非常に危ういものであった。また、解体後のチェコスロヴァキアにおいては、ゲルマン民族の所有でない美術品は個人・公的コレクションを問わず没収されており、ナチスの手を免れ得ない状況にあった¹³。これらの理由から、コレクションが避難の必要に迫られたことは間違いない。

パリ陥落後の 1940 年には、ユダヤ系であり膨大な美術品コレクションを有するロスチャイルド家の財産も接収対象となり、その中にオススキー・コレクションも含まれていた。第二次世界大戦後の返還請求によれば、オススキー家は戦時中に 169 点のコレクションを奪われたが、そのうち 89 点がフランスのレジスタンスにより奪還され、のちに返還されたという¹⁴。返還請求リスト [資料 2] には、オススキー・コレクションが戦時中にたどった経緯に続けて、作家別による作品リストが掲載されている。リスト中にはシャガールの作品として 1 点、「Moujik」(「ロシアの農民」の意) の題で記録された作品が認められる。タイトルが異なるものの、ERR のリストにオススキー所蔵の作品の記載は《山羊を抱く男》1 点のみであることから、本作と同一作品と考えられる。

（３）戦時中の作品の行方

それでは、戦時中に《山羊を抱く男》が辿ることになった経緯について確認してみよう。

本作に関する情報が記載された ERR による目録 [資料3] と写真 [図1] は、ジュ・ド・ポーム美術館への移送後に作成された作品資料である。リポジトリ欄の「AGL」（Arbeitsgruppe Louvre の略号）の表記から、ジュ・ド・ポーム美術館およびルーヴル美術館を担当するスタッフが作成したことが認められる。ジュ・ド・ポーム美術館において、作品目録は占領以前から同館に勤務していたフランス人学芸員ローズ・ヴァランを中心に作成が進められ、作品は所有者ごとに分類のうえ管理された。彼女は ERR の協力者としてドイツ人スタッフとともに目録作成や作品管理の任務にあたったが、密かに自らのノートにも作品情報や移送先を記録し、フランスのレジスタンスに内通を図っていた人物である。

本作のデータを確認すると、管理番号は「R 1722」、タイトルはドイツ語で《雄山羊を持つロシアの農民》（Russischer Bauer mit Ziegenbock）と記載されている。管理番号冒頭の「R」はロスチャイルド家のコレクションであることを示している。本作を含め、オススキー所蔵の作品にはいずれも「R」の略号が付されているが、これは接收時にロスチャイルド邸にあったことから、同家所蔵の接收品と区別されることなく一括で管理されたためであろう。1942 年にヴァランが自らのノートに記録した作品リストにも、ロスチャイルド・コレクションの 1 点として本作の存在が記載されている [資料4]。

1940 年 8 月 29 日にパリのルルー通り 14 番地のロスチャイルド邸から没収された本作は、パリのドイツ大使館へと輸送され、その後ジュ・ド・ポーム美術館に移されている¹⁵。当初、押収美術品は大使館の倉庫とルーヴル美術館に収められていたが、保管場所が足りなくなったことから、1940 年 10 月から 44 年の間、テュイルリー庭園に位置するジュ・ド・ポーム美術館が ERR の没収美術品が集められる場所となっていた。同館が新しい保管場所として選ばれた後、1940 年 10 月 30 日に 400 個あまりの木箱が運び込まれたことが記録されており¹⁶、本作もその際に運ばれた 1 点と考えられる。ジュ・ド・ポーム美術館は単に保管場所として機能しただけではなく、館内ではゲーリングらナチス高官の視察のための展示も行われた。彼らが選別した作品はドイツへ送られ、主に作品交換や売却による外貨獲得に利用されていた。

本作はジュ・ド・ポーム美術館において、2 階の最も奥に位置する第 15 室（通称「殉教者の部屋」）に収められていた様子が当時の写真に記録されている [口絵2、図2]。この展示室はナチスから「退廃芸術」とみなされた美術作品が集められた場所で、他の展示室からはカーテンによって区切られていた¹⁷。壁一面に隙間なく飾られている絵画の多くは、ピカソやマティス、レジェらアヴァンギャルドの芸術家の作品である。他の展示室では古典的な絵画がゆったりと間隔をとって展示されていたことから、「殉教者の部屋」内の作品に対する区別は明白である。本作と同じ壁面には、オススキー所蔵のアンドレ・ドラン《オススキー夫人の肖像》や、オトン・フリエス《春》などの作品も確認できる。また、展示台の一方 [口絵2] にはダリらによるシュルレアリスムの作品が、もう一方 [図2] にはドガやルノワール、セザンヌら 19 世紀末フランス絵画がそれぞれまとめて配置されており、同じ室内でも時代や傾向による分類がある程度行われていたことがうかがえる。

このような美術作品は、資金源として売却されるか、あるいはドイツ帝国にふさわしいとみなされる作品との交換材料として用いられた。本作の処遇については、目録には「売却のため M 計画（M-Aktion）に管理替え」と記載されている。この「M」は家具を指し、パリとヨーロッパ西部の占領地域において、国外に逃れた、あるいは逃れようとしているユダヤ人の住宅から家具類を押収する計画を意味する¹⁸。同計画は、美術作品に関しても、押収した大量の家具と同様に国外に移送・売却する任務を担っていたとみられる。本作は他の多くの作品とともに、1944 年 8 月 1 日にチェコのミクロフ（ドイツ語名ニコルスブルク）へと鉄道で輸送される予定であったが、作品を載せた列車はパリ北東のオーネー＝スー＝ボアで止められることになる。これはヴァランが輸送計画と輸送予定作品リストをフランスの美術館総局長ジャック・ジョーギヤールに伝達し、フランスのレジスタンスが列車の出発を阻止したためであった。この時救出された作品群の 1 点として、戦後に本作の返還が果たされることになる。

4. おわりに

本稿では、《山羊を抱く男》が第二次世界大戦中に被ることになった処遇とその詳細について確認した。それは作者であるシャガールのアイデンティティおよび作風、そして所有者の立場という双方の要因が重なり合ったものであった。特に本作を含むオススキー・コレクションの場合は、所有者の祖国チェコスロヴァキアの解体と、作品の預け先であるロスチャイルド家がユダヤ系であることが重なり、作品の接收という結果に至ってしまった。また、ナチス関係者が作品内容についてどこまで関知していたかは定かではないものの、本作自体がユダヤ文化を主題とした作品であったことも事実である。これらの経緯はいずれも作者の手を離れて起きた出来事であるが、第二次世界大戦下のコレクションに降りかかった現実として認識しておく必要があるだろう。

なお、本稿の執筆にあたっては、2018 年にスイスの高校生（当時）の Aliénor de Biolley さんが、ERR のデータベースに掲載された本作が日本の富山で収蔵されている事実に関心を持ち、当館に質問を寄せてくれたことをきっかけに調査を開始した経緯があった。この場を借りて、情報提供に心より感謝申し上げたい。

資料編

【《山羊を抱く男》 来歴年表】

1925-1934 年頃	チェコスロヴァキア共和国大使シュテファン・オススキーの所蔵となる
1939 年 3 月 15-18 日	チェコスロヴァキアのプラハ占領に伴い、ロスチャイルド邸に移される
1940 年 8 月 29 日	ERR により、パリのルルー通り 14 番地のロスチャイルド邸から接收。ドイツ大使館内で保管
1940 年 10 月 30 日頃	ジュ・ド・ポーム美術館に移動。ロスチャイルド家のコレクションとして登録・管理される 「退廃芸術」とみなされた作品が集められた第 15 室「殉教者の部屋」で保管される
1940-44 年頃	売却のため、M 計画 (M-Aktion) に管理替えとなる
1944 年 8 月 1 日	鉄道によるチェコへの輸送途中、パリ北東オーネー＝スー＝ボアにてレジスタンスにより奪還
1946-48 年	シュテファン・オススキーによる返還請求が行われる
1948-50 年代頃	オススキー家に返還される

【図版】



図 1 : ERR の記録写真 (フランス国立公文書館 (NARA) 蔵)



図 2 : ジュ・ド・ポーム美術館 第 15 室 (「殉教者の部屋」) 展示風景¹⁹

【資料】

資料 1 : イダ・シャガールからの手紙 (1979 年 6 月 6 日、ブレントラスト 柴田昌彦氏宛)



〔和訳〕

拝啓

5 月 29 日付のお手紙をいただき、また私の父の作品に関心をお持ちくださりありがとうございます。

フランツ・メイヤーによる膨大な量の写真資料の中に、私は《山羊を抱く男》、油彩、72×57 cm、1924-25 年制作の図版を提供することができませんでした。それは単純な理由で、私はこの作品の所在がどこにあるのか存じ上げなかったからです。

《山羊を抱く男》はおそらく、フランツ・メイヤーの本に掲載されているカタログの 370 番から 376 番のグループの図版のうち、最も代表的な作品です。

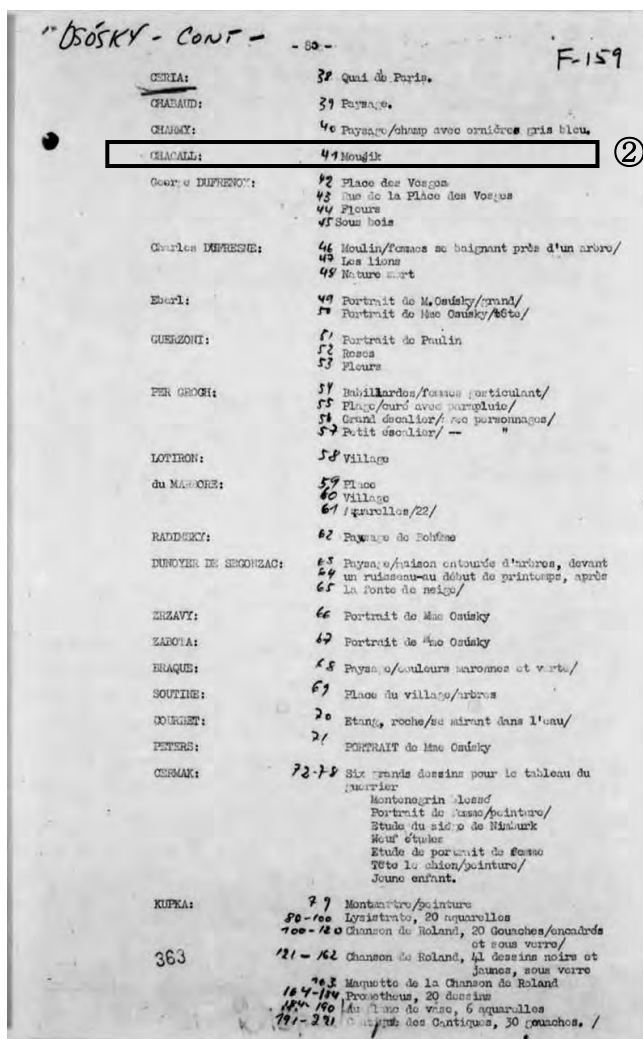
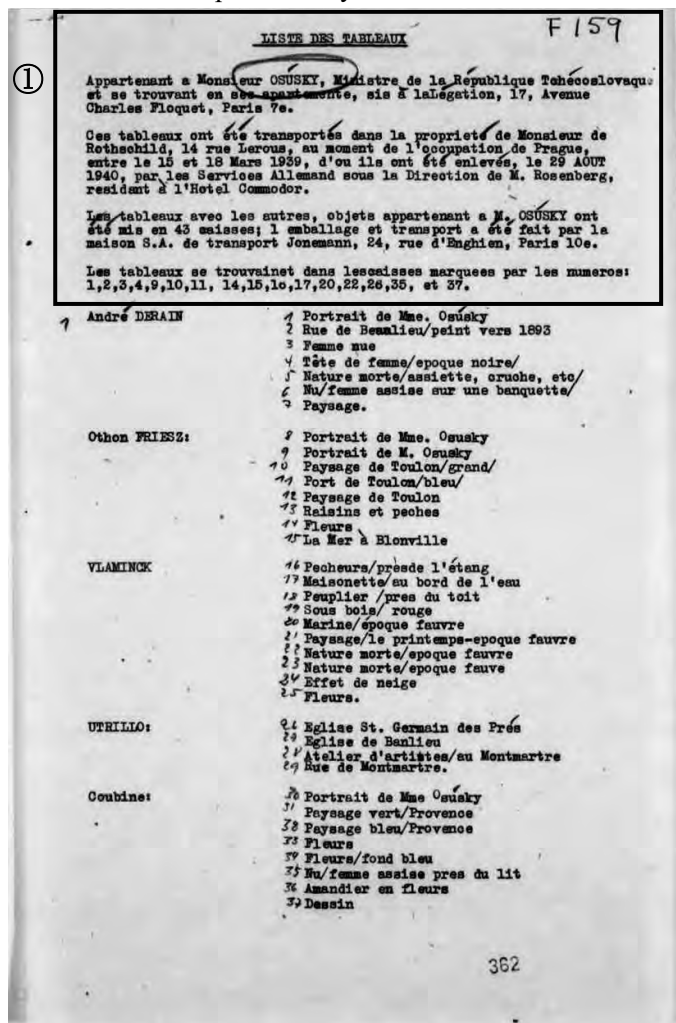
シュテファン・オススキー氏は長い間パリで外交官の職に就いていました。私はこの類まれな方について数々の思い出があります。彼は出身国であるチェコスロヴァキアの公的なコレクションの充実に重大な役割を果たし、そしてパリでは彼が好きだった芸術家たちが飛躍することに貢献しました。

どの美術館がこの素晴らしい作品を愛蔵することになるのか、ぜひ教えて聞かせてください。

敬具

イダ・シャガール

資料2：シュテファン・オススキーのコレクション返還請求リスト、1946-48年
(F159 S. E. M Stephen Osusky France、フランス国立公文書館 (NARA) 蔵) ²⁰



[p. 362 ①和訳]

絵画リスト

チェコスロヴァキア共和国大使のオススキー氏の所有であり、パリ 7 区のシャルル・フロケ大通り 17 番地の公使館所在のアパルトマンで見つかったもの。

これらの絵画作品は、プラハが占領された際、1939 年 3 月 15 日から 18 日の間にルルー通り 14 番地のロスチャイルド氏の屋敷に輸送され、1940 年 8 月 29 日、ホテル・コモドールに駐在するローゼンベルグ氏指揮下のドイツ軍によって、その場所から接收された。

絵画群ならびにその他オススキー氏所有の品々は 43 箱に収められた。その梱包と輸送は、パリ 10 区のアンギアン通り 24 番地のジョヌマン運送株式会社によって行われた。

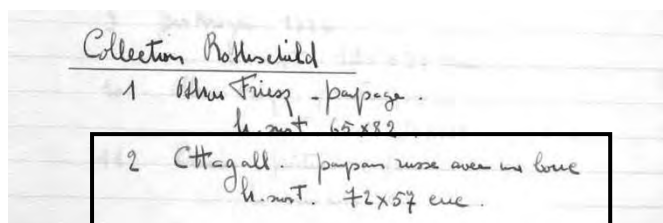
絵画群は以下の番号が印された箱の中から見つかった：1、2、3、4、9、10、11、14、15、16、17、20、22、26、35、37。

[p. 363 ②]

Chagall 41 Moujik

シャガール 41 ロシアの農民

資料4：ローズ・ヴァランからジャック・ジョーギヤールへ送付した作品リスト（部分）、1942 年 3 月 10 日
(フランス国立公文書館 (NARA) 蔵) ²¹



2 Chagall. paysan russe avec un bouc
h. sur t. 72x57cm.

2 シャガール 雄山羊を持つロシアの農民
油彩・カンヴァス、72×57cm

LEICA-PHOTO		KÜNSTLER	HERKUNFTSLAND	DATERUNG	INVENTAR-NR.
					R 1712-25
FILM-NR.	LEBENSZEIT	AUFBEWAHRUNGORT		WERT	INV.-NR. ALTESLG.
BILD-NR.	GROSSFOTO	AGL			AUS KISTE NR.
THEMA BZW. GEGENSTAND					
R 1712 Dumarbore, 1928 Flusaufer, Tuschzeichnung. 33 x 54 cm.					
BESCHREIBUNG R 1712 " Pelzen am Meer bei Quiberon. Federzeichnung m. Aquarell.					
R 1714 Binouet, 1927 Stilleben. Öl auf Lwd. 25 x 35 cm.					
R 1715 Regnard Sage, Polteressen mit vier Pferden im Schnee. Aquarell - 35 x 26 cm.					
R 1716 " Ringkampf einer gegen sechs. Aquarell. 35 x 42 cm.					
(wenden!)					
MATERIAL	GRÖSSE	GERAHMT FASSUNG	BEZEICHNET SIGNATUR		VERLEIB
ZUGANGSTAG					
IN PARIS					
IM REICH					

DECLASSIFIED	
Authority NND 775054 By JAC, NARA Date 4/4/21	
R 1717 Dumarbore.	Exotischer Vogel. Aquarell. 36 x 42 cm.
R 1718 "	Exotischer Vogel. Aquarell. 36 x 42 cm.
R 1719 Mucha 1903	Frau auf einer Chaiselongue sitzend. Pastell - 57 x 24 cm.
R 1720 (R 906)	Chinesische Lackmalerei. Gold-schwarz-braun. 165 x 53 cm.
R 1721 O. Priesz	Landschaft. Öl auf Lwd. - 65 x 82 cm.
R 1722 Chagall	Russischer Bauer mit Ziegenbock. Öl auf Lwd. - 72 x 57 cm. gerahmt.
R 1723 O. Priesz 1934	Weibliches Porträt. Öl auf Lwd. - 82 x 65 cm. gerahmt.
R 1724 Redon	Blumenstilleben. Öl auf Lwd. - 55 x 73 cm. gerahmt. (R 904)
R 1725 Segonzac	Landschaft. Öl auf Lwd. 65 x 81 cm. gerahmt.

① AUFBEWAHRUNGORT AGL

保管場所 AGL（ルーヴル美術館作業班）

② R 1722 Chagall Russischer Bauer mit Ziegenbock.
Öl auf Lwd. - 72 x 57 cm. gerahmt.

R 1722 シャガール 雄山羊を持つロシアの農民
油彩・キャンバス - 72 x 57 cm 額装

③ zurück an M-Aktion zum Verkauf

売却のため M 計画に管理替え

- 1 本作の富山県立近代美術館収蔵当初の保全・修復状況については、柳原正樹「マルク・シャガール「山羊を抱く男」について」『収蔵作品についての報告 1984』富山県立近代美術館、1984年、7-12頁。なお当館では、富山県美術館への移転後の2018年にも本作の修復を行っている。
- 2 2010年にインターネット上に公開された。データベースは、“Cultural Plunder by the Einsatzstab Reichsleiter Rosenberg: Database of Art Objects at the Jeu de Paume” (<https://www.errproject.org/jeudepaume/>)にて閲覧可能である。
- 3 2017年当館収蔵。シュオプ・デリクール(Schwob d'Hericourt)のコレクションの1点であり、ERRに1942年2月に接收され、ジュ・ド・ポーム美術館に保管された旨が記録されている。“Cultural Plunder by Einsatzstab Reichsleiter Rosenberg: Database of Art Objects at the Jeu de Paume” (https://www.errproject.org/jeudepaume/card_view.php?CardId=7900). 2021年3月9日閲覧。
- 4 プロジェクトに関連するアーカイブの詳細については下記を参照。Appendix 1 to the ERR Archival Guide, “French and Belgian Jewish Art Collections Processed by the ERR in the Jeu de Paume, 1940-1944: Correlation Tables for Archival Sources (November 2019).” (https://www.errproject.org/guide/ERR_Guide_Appendix-1.pdf). 2021年2月9日閲覧。
- 5 “Group of the thick impasto paintings. 1924/25,” Franz Meyer, *Marc Chagall: Life and Work*, Harry N. Abrams, 1963, pp. 651-652. 同カタログレゾネには、本の出版当時、本作が所在不明であったことから掲載されていない。
- 6 黒江光彦氏による本作の作品状態調査記録（1979年6月30日付）では、「(1) 山羊の顔の先端部の変更 (2) 人物の左腕が山羊に重ねられている (3) 右下サインの上に加筆前のサインのIIが残されている (4) 山羊の鼻頭左下の三角形」の4カ所の変更が指摘されている。柳原正樹、同掲書、9頁。
- 7 リン・H・ニコラス著、高橋早苗訳『ヨーロッパの略奪 ナチス・ドイツ占領下における美術品の運命』白水社、2002年、27頁。
- 8 同、32-33頁。
- 9 “Cultural Plunder by Einsatzstab Reichsleiter Rosenberg: Database of Art Objects at the Jeu de Paume” (<http://www.eerproject.org/jeudepaume/about/err.php>). 2021年1月7日閲覧。
- 10 Nikolaj Savický, *Ceskoslovenský stá a francouz um v letech 1923 až 1937 (Czechoslovakia and the French modern art from 1923 to 1937)*, Univerzita Karlova, Filozofická fakulta, 2008, pp. 127-128.
- 11 *Ibid.*, pp. 120-121.
- 12 本作購入時の展覧会歴に“Exposition Umělecká Besada - Praque, 1934, Czechoslovakia”と記録されている。ウムニエレッツカー・ベセダは、チェコで1863年に設立された芸術協会。同国内で文学・音楽・美術にまたがる主導的な役割を果たし、大戦間にはフランスを中心に国際的な美術の動向を紹介する展覧会を主催していた。Derek Sayer, “Modernism, Seen from Prague, March 1937,” *Art@s Bulletin* 3, no. 1, 2014, pp. 19-20.
- 13 リン・H・ニコラス、同掲書、59頁。
- 14 “Stephan and Pauline Osusky,” “Cultural Plunder by the Einsatzstab Reichsleiter Rosenberg: Database of Art Objects at the Jeu de Paume” (https://www.errproject.org/jeudepaume/owner_view.php?Owner_ownerid=362). 2021年2月9日閲覧。
- 15 R 1722 / Chagall, *Russischer Bauer mit Ziegenbock*. “Cultural Plunder by the Einsatzstab Reichsleiter Rosenberg: Database of Art Objects at the Jeu de Paume” (https://www.errproject.org/jeudepaume/card_view.php?CardId=12216). 2021年1月7日閲覧。
- 16 リン・H・ニコラス、同掲書、157頁。
- 17 Rose Valland, *Le Front de L'Art*, Réunion des musées nationaux - Grand Palais, 2016, p. 255.
- 18 リン・H・ニコラス、同掲書、169-170頁。
- 19 “Photographies prises au Jeu de Paume sous l'Occupation,” Site Rose-Valland, Musées Nationaux Récupération (<http://www2.culture.gouv.fr/documentation/mnr/MnR-jdp.htm>). 2021年2月6日閲覧。
- 20 “Records of the Monuments, Fine Arts, and Archives (MFAA) Section of the Preparations and Restitution Branch, OMGUS, 1945-1951” database with images Fold3 (<https://www.fold3.com/title/795/omgus-monuments-fine-arts-and-archives>). 2021年2月6日閲覧。
- 21 *Recueil (reconstitué) des notes e Rose Valland Jacques Jaujard*, 1941-1944, p. 48. (https://www.siv.archives-nationales.culture.gouv.fr/siv/UD/Fran_IR_053980/c25s2lcieshf-1mv110gxv9it8). 2021年2月9日閲覧。

資料紹介 東野芳明旧蔵マルセル・デュシャン関連書籍・ノート

主任 遠藤 亮平

はじめに

富山県美術館は評論家・東野芳明の旧蔵書籍、作品等を収蔵している。昨年度の研究紀要¹では、その中から、20世紀を代表するアーティストたちがサインや作品を寄せた東野の手製本《「現代美術」作品集》を紹介したが、今回は特に東野旧蔵のマルセル・デュシャンに関連する書籍、ノート類の資料を中心に、東野によるデュシャン受容の一端を紹介したい。

東野によるデュシャン受容に関しては、平芳幸浩氏の論文「東野芳明のデュシャン／中原佑介のデュシャン」（『美術史』180号、2016年）に詳細にまとめられている。平芳氏によれば、東野による当初のデュシャン理解は、戦前からのダダの関連としての理解に留まるものであったが、1958年以降1963年までの間にデュシャン理解に「転機」があったとし、1959年に出版されたロベール・ルベル著のデュシャンのモノグラフや、ジャスパー・ジョーンズのアトリエでデュシャンの作品《雌のイチジクの葉》を見た時をその「転機」とする考えを示している。平芳氏は東野の文章「マルセル・デュシャンの方法序説（下）」（『みづゑ』703号、1963年9月）の記述を基に、転機が1963年までにあったとしているが、平芳氏も記す通り、東野は1962年の暮に、ジャン・ティンゲリーに連れられてニューヨークのデュシャンのアパートを訪ね、デュシャンに初対面を果たしていた〔口絵3〕。また、東野は1958年5月に始まる自身初の欧米周遊の中で、アメリカ滞在中（1959年4～7月頃）に世界有数のデュシャン・コレクションを有するフィラデルフィア美術館を訪れ、「たいへんなショック」（『パスポート・NO.328309』、三彩社、1962年、238頁）を受けたことを記しており、日本国内では見ることが出来なかったデュシャンの作品を数多く目にすることで、デュシャンに対する関心、理解を次第に深めていったのであろう。

東野はデュシャンに何回会ったのか

東野はその著書『つくり手たちとの時間 現代芸術の冒険』（岩波書店、1984年）のあとがき「戦後美術への旅」の中で、「ニューヨークの10th Streetにあったデュシャンのアパートにはじめて行ったのは、二度目のアメリカ旅行の時、1960年だったと思う。それ以後、1968年に亡くなるまで、パリやニューヨークに行く度にお会いしては、閑談を楽しんだものだった。」（322頁）と記している。東野は度々デュシャンに会い、親交を深めたようだが、実際、何度デュシャンに会うことができたのだろうか。東野が初めてデュシャンに会ったのは1962年12月、1968年10月2日にデュシャンが亡くなるまでの6年弱の間の東野の動きを順を追って確認してみる。

初めてデュシャンに会った1962年の暮から翌年にかけての3ヵ月ほどのアメリカ滞在の後、東野の海外渡航が確認できるのは、1965年9月頃から翌年4月頃にかけての渡欧・渡米である。1965年9月末からパリで開催された国際美術評論家連盟総会に参加した後、11月からはジャパン・ソサエティの招待でアメリカに渡ると、芸術家のアトリエ巡りや日本の現代美術についての講演等をしながらアメリカを回った。このアメリカ滞在については『アメリカ「虚像培養国誌」』（美術出版社、1968年）に詳しい。デュシャンは夏をスペインのカダケス、秋をパリで過ごした後ニューヨークに戻るというスケジュールを毎年繰り返していたため、東野はパリ滞在中にパリ郊外のヌイイーのアパートにいるデュシャンに会い、その後、ニューヨークでもアパートを訪ねてデュシャンに会っている。ニューヨークでデュシャンに会ったのは、「コンバイン日記」（『アメリカ「虚像培養国誌」』、9-43頁）によれば1966年2月15日の出来事になっているが、この時東野の手製本にデュシャンから貰ったサインには「Déc 65」の記載があるため、「コンバイン日記」に記されたエピソードは12月の出来事だと考えられる。東野の記した日付と実際の日付に齟齬が認められるが、1966年4月までの約半年間の滞米中、東野がデュシャンに会う機会は他にもあったのかもしれない。この滞米中、東野の記述から確実なのは、1966年3月にニューヨークのシティ・センターで開催された文楽公演で会ったこと（『マルセル・デュシャン』、美術出版社、1977年、416頁）のみであり、この他にデュシャンに会ったエピソードは紹介されていない。1966年4月の帰国以降、1967年に東野が海外渡航をした記録、記事は見られず、次に海外渡航が確認できるのは、ヴェネツィア・ビエンナーレとドクメンタを見るための1968年6月からの渡欧（6月17日ヴェネツィア、6月24日ミラノ、6月30日～7月7日パリ）であり、7月中にニューヨークに移動している。この渡欧・渡米に関する記事²にデュシャンとの出会いは記されていない。1968年7月の渡米以降の東野の動きは確認できないが、この年のデュシャンは6月5日にチューリヒからロンドンに移動し、その3日後チューリヒに戻ると、すぐにジェノバからバルセロナ、そしてカダケスに移動してその夏を過ごし、9月20日にパリに移っているため³、東野がヌイイーで死去したデュシャンに会う機会はなかったであろう。

以上のような海外渡航歴から考えるならば、デュシャンと会ったことが確実なのは、1962年の暮（ニューヨーク、デュシャンのアパート）、1965年の秋（パリ、ヌイイーのアパート）、1965年12月（ニューヨーク、デュシャンの

アパート)、1966年3月(ニューヨーク、シティ・センター)であり、1965年秋から翌年4月の滞欧・滞米期間中には他にも会っていた可能性は考えられる。東野は「パリやニューヨークに行く度にお会いして」と記してはいたが、海外渡航が現在のように一般的ではなかったこの時代、デュシャンに会う機会はかなり限られていた。また、東野はこの伝説的な人物と実際に会った際には、そのエピソードを記事などに詳細に書き留めているため、エピソードに留めた以外に会った可能性は低いのではないだろうか。

デュシャン関連旧蔵書

当館は東野から購入した書籍を1540冊所蔵している⁴。これは旧蔵書籍の全てという訳ではなく、東野が親密な交流を持ったジャスパー・ジョーンズ関連の書籍の多くは東野の元に残された⁵。一方、デュシャン関連の書籍は豊富に含まれており、東野自身の書き込みが散見される旧蔵書籍からは、東野によるデュシャン研究・受容の一端を見ることが出来る。

旧蔵書籍に含まれる主要なデュシャン関連書籍は表(本紀要18-19頁)の通りである。東野の著書『マルセル・デュシャン』の巻末には文献目録が収録されているため、参考までに目録と比較してみると、目録掲載の250冊の内、51冊が旧蔵書に含まれている。東野がこれらをいつ入手したのかは定かではないが、書籍に残された傍線や書き込みは、東野が確かにこうした書籍からデュシャンに関する情報を得ていたことを示している。書き込みの中には、日付と場所を明記したものもあり、フィラデルフィア美術館のアレンズバーグ・コレクションのカatalog *Arensberg Collection* (Philadelphia Museum of Art, 1954)には「June, 1st, 1959 at Philadelphia Yoshiaki Tono」との書き込みがあり、東野がフィラデルフィア美術館を訪れ、デュシャン芸術に触れた日を推察できる。わざわざ日付を書き込みたくなるほど、東野はこの訪問、デュシャン作品との出会いに「ショック」を受けたのだろう。

51冊の中には、ロベール・ルベルによるデュシャンのモノグラフ *Sur Marcel Duchamp* (Editions Trianon, 1959)を始め、「グリーン・ボックス」の英語完訳版 *The Bride Stripped Bare by Her Bachelors, Even* (George Wittenborn, Inc., 1960)、デュシャンの生前に開催された総括的な回顧展の図録 *The Almost Complete Works of Marcel Duchamp* (Arts Council of Great Britain, 1966)等、デュシャン研究の上では基礎的な重要書籍は網羅されているが、東野もオープニングセレモニーに参加した1973年にフィラデルフィア美術館で開催されたデュシャン展の図録は含まれておらず、当館収蔵の東野旧蔵書籍は、その全てではないようだ⁶。

『マルセル・デュシャン』巻末文献目録に掲載されていないデュシャン関連本(1977年以降に発行されたもの、もしくは77年以前の発行だが目録未掲載のもの)は61冊ある。『マルセル・デュシャン』が出版された同年にポンピドゥー・センターで開催された大規模なデュシャン展の図録 *Marcel Duchamp: abécédaire* (Musée National d'Art Moderne, Centre National d'Art et de Culture Georges Pompidou, 1977)を始め、デュシャンの没後長らく公開が禁止されていた通称「遺作」の設置マニュアルのファクシミリ版 *Étant Donnés* (Philadelphia Museum of Art, 1987)、メニル・コレクションで開催された展覧会図録 *Marcel Duchamp: Fountain* (Houston Fine Art Press, 1989)など、生前最後の東野による著作が『マルセル・デュシャン「遺作論」以後』(美術出版社、1990年)であったように、1990年に病に倒れるまで精力的にデュシャン研究を続けていたことが旧蔵書籍から伺うことができる。

書籍の中には、恐らく入手困難等の理由のために複写を製本した書籍が若干数含まれているが、*Marcel Duchamp: Fountain* の複写が閉じられたバインダー[図1]は、異なる背景を持っているようだ。その内容は一見したところ、出版された書籍と同一のように見えるが、バインダーの表紙には「MARCEL DUCHAMP / FOUNTAIN Maquette 6/6/88 Walter Hopps Copy」と印字されたカードが貼られている。バインダーを開くと書籍表紙のコピーがまず閉じられ、その余白に「10/16/88 Dear Tono — This Proof copy is for you. xxx Walter Hopps」の献辞と、メニル・コレクションのディレクターであるウォルター・ホップスの名刺、その名刺を矢印で指して「write when you can」と記されている。ウォルター・ホップスが東野に送った複写であることがわかるが、書籍と複写の内容についてその詳細を見比べてみると、記された展覧会会期の他、文章のレイアウトや参考図版等に所々若干の差異が見受けられ、実際には書籍を複写したものではないことがわかる。この資料は書籍化前の見本版、校正刷りであり、1989年の出版の前、1988年6月6日に作成され、同年10月16日に東野に送られたようだ。ホップスは本文中でも東野の文献を取り上げており、出版前にデュシャン研究者の一人として東野に内容の確認を依頼したと考えられる。実際、巻末掲載の作品リスト等には東野による

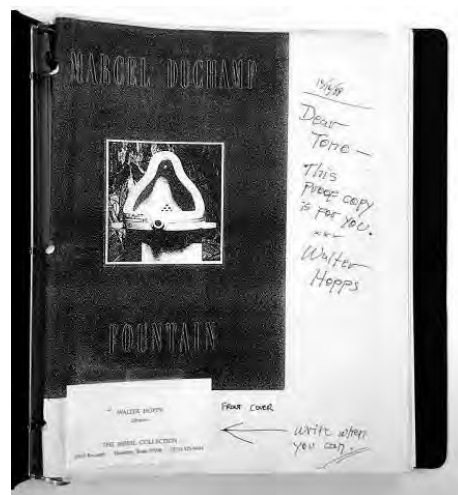


図1. バインダーに収められた *Marcel Duchamp: Fountain* のコピー。ウォルター・ホップスのメッセージが書かれている。

書き込みが若干確認できるが、その書き込みによる修正内容は書籍版には反映されていない。東野は内容に目を通しながらも、修正箇所については連絡を行わなかったのかもしれない。

《遺作》ノート

東野は 1973 年 9 月 22 日からフィラデルフィア美術館で開かれたマルセル・デュシャン展に、そのオープニングディナー（9 月 19 日）から参加した。その様子は、「デュシャン拾遺」（『gq』5 号、1974 年、37-47 頁）でレポートされ、後に編集されたその一部が東野著『マルセル・デュシャン』の「あとがき」で紹介されている。この滞在中に東野は、デュシャンが没後 15 年間公開を禁じたと言われる《(1)落ちる水(2)照明用ガス、が与えられたとせよ》（通称《遺作》）の設置方法を記したマニュアルを見る機会を得て、そのマニュアルをノート〔図 2〕に書き写した。東野がその件について記した箇所を引用する。

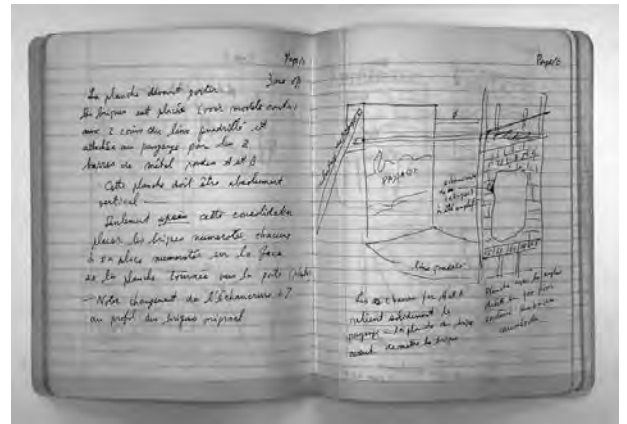


図 2. 《遺作》ノート：東野がデュシャンの《遺作》の設置マニュアルを筆写したノート

日記から (2)

1973 年 9 月 21 日 (金)

相変わらず明け方に眼がさめて、空腹で 6 時頃、レストランに下りてひとりで朝食をとる。早めに (10:00am) 美術館へ行き、アンヌの事務所で、「遺作」のためのノートをコピーする（注、「大ガラス」には、「グリーン・ボックス」などの観念的なメモがたくさん残っており、視覚的な作品と観念的な言語との緊張関係が存在しているが、「遺作」に関しては、これを完成したニューヨークのアトリエから、移動させ、再構成するための、徹底的に技術的な事柄だけを書き残したノートが一冊残っているだけである。この内容はやはり公開を禁じられているのでふれるわけにはいかないが、この覗きの部屋の舞台裏を各部分の写真とそれに直接書き込んだ技術的な指示で示したノートは、じつに衝撃的なものである）。

（「デュシャン拾遺」、43 頁）

『マルセル・デュシャン』の「あとがき」には、「早めに (10:00am) 美術館へ行き、昨日にひきつづき、アンヌの事務所で」（傍点筆者）と加えられており、東野はオープニングディナーの翌日である 20 日から 21 日に掛けてこのマニュアルを筆写したようだ。21 日は昼食を済ませた後、午後 2 時から開催されたアンヌ・ダナンクールの講演会を聞きに行っているため、書き写しは昼までには終わらせたことが分かる。「デュシャン拾遺」と「あとがき」に記された日記の日付は、9 月 19 日、21 日、22 日の 3 日間であり、20 日についての記述が見られないため、おそらく 20 日は丸一日をマニュアルの筆写に費やしたのだろう。

東野は 2 日間に渡り、マニュアルに記された説明文だけではなく、説明用のスケッチや、添付された写真に至るまでノートに写し取った。限られた時間内で書き写すため、説明書きの文章は全て書き写されているが、写真や図に関しては、適宜省略されている。マニュアル 20 ページの照明の配置を示した俯瞰図は、ノートではなく東野の名前と住所が印字された便箋にほぼ実寸で詳細に書き写され、ノートに貼り付けられている。書き写しはこのノートでは収まらず、裏表紙の裏に記された 44 ページに続くその後は追加された 3 枚のノート紙に記されている。

長らく公開が禁じられたマニュアルの存在は、アルトゥーロ・シュヴァルツが記した *The Complete Works Of Marcel Duchamp* (Abrams, 1969) の文中で既に紹介されており、東野も目にする機会をうかがっていたことだろう。しかしながら、東野がどのような経緯でこのマニュアルを閲覧することになったのか、どの程度この閲覧が計画的なものであったのかは不明である。書き写しに用いられたノートの中で、マニュアルはノートの途中から書き写されており、冒頭の数ページは別のメモが書き込まれている。冒頭のページはホチキスで留められており、内容の全ては確認できていないが、ノートの冒頭には「Les Trois Duchamp et Echoes」とあり、また閉じられたページの冒頭には「Cage のこと Roussel のこと 3 人兄弟をチェスを通して見る」と記されているのが読み取れる。東野は 1984 年にギャラリーとところで開催された「Les 3 Duchamps」展の図録に「デュシャン三兄弟とチェス」を寄稿しているため、そのいち早い構想メモかもしれない。公開が禁じられたノートを書き写すという貴重な機会に、果たして東野は使いかけのノートを持参したのだろうか。

東野は書き写したこのノートの内容の一部を「デュシャン拾遺」と「あとがき」の中で紹介した他、『マルセル・

デュシャン』所収「第1章伝説の崩壊」の注釈(60頁)でわずかに紹介するだけであった。このマニュアルの内容の公開は禁止されていたため、東野も無暗に記すことはなかったのだろうが、実際、このマニュアルは「遺作」を組み立てるための作業手順を示した説明書のようなもので、「グリーン・ボックス」や「ホワイト・ボックス」などの難解で形而上学的なメモを読み、「大ガラス」の解釈をそこから汲みとろうとしてきた者は、徹頭徹尾、再構成の技術的記述に終始した今回のテキストを前にしては、戸惑うほかない」(『マルセル・デュシャン「遺作論」以後』、235頁)のは、東野も同様であったのだろう。このマニュアルは1987年にデュシャンの生誕100年を期に、フィラデルフィア美術館からファクシミリ版として出版された(*Étant Donnés* (Philadelphia Museum of Art, 1987))。それを受けて、東野は「マルセル・デュシャン「遺作」論再説—縦ならぬ横の電気詩ロビンソン」(『季刊みづゑ』1988年春号、40-59頁)の中で、このマニュアルについて記しているが、自身が1973年にこのマニュアルの実物を書き写したることについては触れていない。

デュシャン透視考抜刷集

東野は美術手帖1972年2月号から1975年5月号にかけて、「デュシャン透視考」と題するデュシャン論シリーズを16回にわたって連載した。この連載はその後、東野の単著『マルセル・デュシャン』にまとめられ1977年に出版されている。東野旧蔵資料の中に、この連載の抜粋を製本した手製本[図3]が含まれている。手製本に書き込まれた誤字脱字などの修正や情報の追加は、単行本にそのまま反映されているため、この手製本は単行本化のために作成されたと考えられる。しかしながら、この手製本の内容は単行本の内容と全く同じというわけではなく、連載の第1回から16回まで順番に並んだ後、「空気芸術空論」(『美術手帖』1969年6月号)、「デュシャン 反創造の神話—デュシャン(そしてジョーンズ)」(『現代思想』1974年1月号)、「座談会 デュシャンを乗りこえるもの」(『美術手帖』1969年11月号)、「瀧口修造「急速な鎮魂曲 マルセル・デュシャンの死」」(『美術手帖』1968年12月号)が続いている。手製本は単行本化に向けた当初の構想を示しているのかもしれない。

手製本の外装には、一般的にプッシュトングと呼ばれる器具を写したモノクロコピーが用いられている。このプッシュトングは、東野がデュシャンの「グリーン・ボックス」のメモに登場する「氷挟みをレディメードとして買い求める」を自身のゼミ展のために実行した際に、「氷挟み」として入手した器具であり、この経緯については次項で紹介する。



図3. デュシャン透視考抜刷集
外装にはプッシュトングの写真が用いられている。

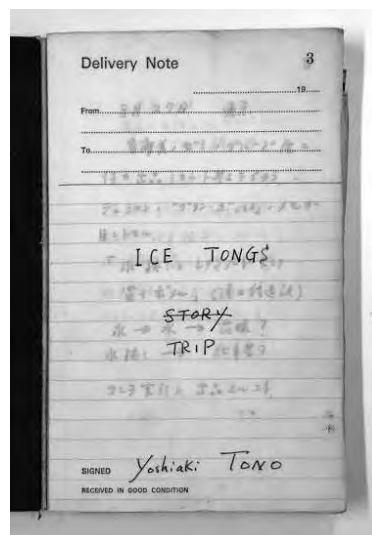


図4. 「ICE TONGS TRIP」ノート

「ICE TONGS TRIP」ノート

「ICE TONGS ~~STORY~~ TRIP」と記されたこのノート[図4]は、東野が1974年に多摩美術大学で開催した自身のゼミ主催展覧会(ゼミ展)に作品を出品した際、その制作経緯などを日記形式で記したものである。ノートには、1974年8月27日から1975年3月頃にかけての事柄が記されているが、全文を掲載することは紙幅の都合上できないため、ここでは記された内容の概要を紹介する。

1967年から多摩美術大学で教鞭をとっていた東野は、1974年からゼミ展を毎年開催するようになった⁷。ゼミ展は東野ゼミ参加者による学内展ではあったが、東野は制作プロセスや参加者同士の協働を特に重視し、展覧会に至る過程こそテーマであるとして、「反展覧会主義」「反作品主義」という言葉でこのゼミ展を説明している⁸。展覧会作りを行うという点では、その後芸術学科のカリキュラムとして1984年から東野の肝入りで始められた、自身のゼミ主催の現代美術展「TAMA VIVANT」の前身と言えるだろう。

東野がこのノートに記した1974年のゼミ展はこの後続くゼミ展の初回になり、「WATER」がテーマになっている。ノートに挟まれた開催要項のコピーによれば、このゼミ展は11月1日から4日間、多摩美本館の304・305号室で開催され、東野とゼミ生の他、宇佐美圭司、三木富雄、李禹煥、高見沢文雄が「特別参加」し、11月2日には東野と特別参加作家出席の討論会も行われた。展覧会のテーマは学生間でも議論されたようだが、結果的には東野の一声で決まったらしい。この展覧会に東野は、瀧口修造が訳したデュシャンの「グリーン・ボックス」の一節、「氷挟みをレディメードとして買い求める」を実行し、出品することに決め、「ICE TONGS TRIP」が始まる。東野は9月初旬か

ら半ばにかけて欧州を周り「氷挟み」探しを行っているが、ゼミ展のために欧州へ渡ったというわけではなく、9月7日からデンマークのレイジアナ美術館で開催される自身が携わった展覧会「デンマークの日本」展のオープニングへの参加が主目的であったようだ。東野はモスクワ経由でコペンハーゲンに飛び、その後パリ、ロンドンと巡り、各地の友人、知人たちにも意見を聞きながら「氷挟み」探しを進めた。コペンハーゲンではクヌート・イェンセン（レイジアナ美術館創設者）、パリではルネ・ロラン（写真家）、ポントゥス・フルテン、サム・フランシス、ジャスパール・ジョーンズ、オットー・ハーン（美術批評家）、ロンドンではバリー・フラナガンに会い、事あるごとに「氷挟み」について尋ねた。この旅の中で、パリの金物屋で「氷挟み」として買い求めたのが、一般的にはプッシュトングと呼ばれる器具であり、おそらく先に紹介した「デュシャン透視考抜刷集」の外装に用いられたプッシュトングと考えられる。東野はロンドン滞在中に「グリーン・ボックス」英訳版の出版に携わったリチャード・ハミルトンにも電話をかけたが、ハミルトンと話すことはできず、帰国後にハミルトン宛に「氷挟み」について問い合わせる手紙を出した。ハミルトンは即座に返信を送り〔資料1〕、その手紙もノートに綴じられている。帰国後、東野は「Duchamp のメモの字と Hamilton の英訳と瀧口さんの日本訳の三つの文章をシルク作品に」¹⁰することを思い立った。しかしながら東野は版画の技術に通じていたわけではなかったため、版画研究室のスタッフや、ゼミ展に「特別参加」する高見沢文雄の協力を得て、シルクスクリーン版画作品を完成させた。最終的に東野は、パリで購入したプッシュトングとこの版画作品、そしてこのノートをゼミ展で展示したらしいが、ノートに関しては「早速読み出すひとがいたのでうろたえる。あまりに説明的な解釈を押しつけそうなので、結局、出品しないことに」¹¹したとノートに記している。東野はこの版画作品をティニー・デュシャンにも贈り、ティニーからのお礼の手紙〔資料2〕もノートに綴じられている。その後、この版画作品は1975年2月12日から25日にかけて西村画廊で開催された「本・オブジェ」展にも出品され、そのカタログ『これは本ではない』（エディシオンエパーヴ、1975年）に《氷挟みをレディメードとして買い求める》として図版〔口絵4〕が掲載されている。

結び

当館が所蔵する東野旧蔵作品・資料は、これまでもコレクション展示内で紹介してきたが、まだその存在はあまり知られていない。東野の関連資料は、当館の他、多摩美術大学に残されており、これらの更なる調査研究が課題である。言説のみならず、資料の実証的な調査により、東野自身の欧米美術の需要、芸術家たちとの交流を明らかにすることで、20世紀欧米美術の日本での需要に際して東野が果たした役割を明らかにしていきたい。

本稿の執筆に当たり、海老塚耕一様より資料をご教示、ご提供いただきました。厚く感謝を申し上げます。

¹ 遠藤亮平「作品紹介 東野芳明編《「現代美術」作品集》」『富山県美術館紀要 創刊号（平成31・令和元年度）』富山県美術館、2020年、6-15頁。

² 「ヴェネツィア・混乱の一週間」『芸術新潮』1968年8月号、59-64頁。「燃えつきたパリ滞在記」『デザイン批評』7号、1968年10月、102-110頁。「あとがき」『アメリカ「虚像培養国誌」』、1968年7月、261-265頁。

³ Calvin Tomkins, *Duchamp: A Biography*, Henry Holt & Co, 1996, pp. 447-449.

⁴ 平成4～7、22年に購入。

⁵ 当時、東野芳明氏所蔵の美術品、書籍の購入交渉を担当したのは杉野秀樹前副館長である。以下は前館長からの聞き取りによる。富山県立近代美術館が東野芳明氏所蔵の美術品及び書籍の購入を進めたのは、開館前の準備時代からお世話になってきた芳明氏が病に倒れ、芳明氏の復帰を願い、東野家を経済的に支援するためでもあった。夫人の明代氏と何度か入手の話し合いをした。蔵書に関しては基本的に「すべて」ということで話がまとまったが、夫人からたつてのお願いということで以下の話を受けた。「夫は生粋の研究者です。今、復帰を目指して懸命にリハビリをしています。その励みとするためにも2階の寝室（あるいは書斎）にあるジャスパール・ジョーンズを中心にした、東野にとって、研究者にとって、かけがえのない書物は別の機会にしてもらえないでしょうか。これらが手元なくなると、研究者としての東野はもう...」。言うまでもなく夫人からの懇願を即刻受け入れた。

しかし明代夫人が2003年10月に急逝され、話し合いの相手が不在となり、これ以上立ち入るべきではないと判断した。

⁶ 当館所蔵の東野旧蔵書籍には多くのサイン本が含まれているが、東野が『マルセル・デュシャン「遺作論」以後』の「あとがき」（326-327頁）で触れている、「世のデュシャンピアンたちの独特なオマージュ的署名」をもらったという東野の著書『マルセル・デュシャン』は、当館には収蔵されていない。

⁷ 東野ゼミ展は1974年以前にも、「中国国連復帰記念展」と称する展示を行っていたことを、東野は述べている。東野ゼミに関しては「リポート 多摩美術大学 東野ゼミ」『小説怪物』1978年11月号、107-122頁に詳しい。

⁸ 「リポート 多摩美術大学 東野ゼミ」『小説怪物』1978年11月号、109頁。

⁹ 同上。

¹⁰ 「ICE TONGS TRIP」ノート10月1日の記述。

¹¹ 「ICE TONGS TRIP」の記述、日付は不明。

【資料】

資料1: リチャード・ハミルトンからの手紙 (1974 年 10 月 4 日、東野芳明宛)



〔和訳〕
芳明へ

ロンドンではお会いできず残念でした。この貴重な機会を得られたらよかったのですが。

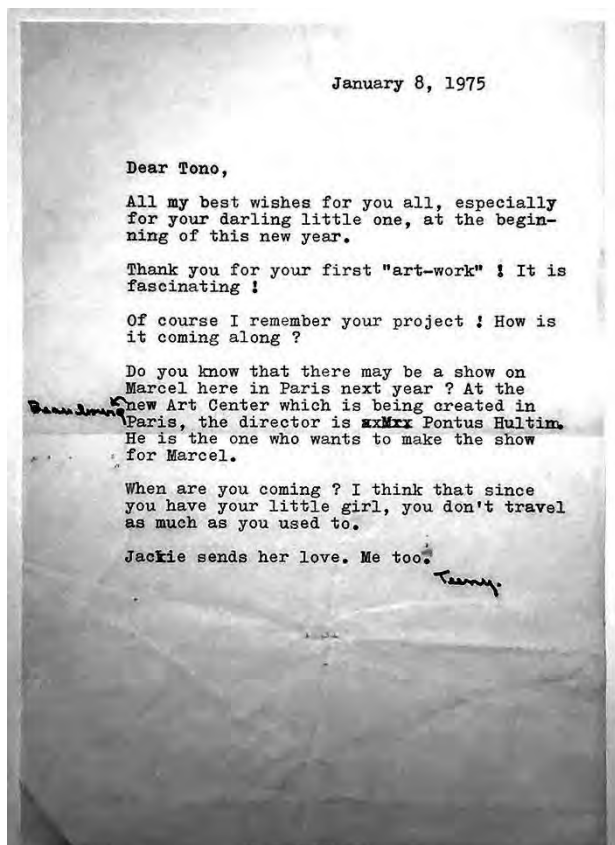
あなたの質問に関して言えば、私はマルセルの翻訳者として全く身に値しない評判を得ています。実際、私はフランス語を全く話せませんし、グリーン・ボックスの翻訳はジョージ・ハード・ハミルトンがマルセル自身との密接な共同作業の元に行いました。その本がまさに私の着想であったことは認めなければなりませんが、私の役目は単純にタイポグラファー、デザイナーでした。私は特定の言葉の翻訳に関していくつかの考えがありましたが、それは関連する概念について考えた結果であって、フランス語の知識があつてのことではないのです。あなたやオットー・ハーンのように、私も氷挟みという言葉は小さな種類のもの※を意味していると考えていました。しかしながら、ある物体を思い浮かべようとしたことは思い出せません。どんな形、型、大きさを彼が考えていたのかを特定することにはあまり意味がないと思います。彼が決して「氷挟みを買う」ことがなかったという事実（その逆の証拠がないので、私はそれは事実だと思います）が、ある特定の氷挟みは重要ではないという、より興味深い可能性を表しているのです。重要なことは、曖昧な意図を記すことが、形について決定することと同じくらいにとっても芸術的な行為であるということです。「氷挟み」(pince à glace) という言葉そのものが芸術作品、つまりはその言葉が芸術作品の一形態なのです。この考えは、「レディメイド」というテーマにおける異なる形態として、マルセルに典型的なものだと思います。

リチャード

※「ICE TONG TRIP」の中で、ジャスパー・ジョーンズは「氷挟み」をカクテル用の小さなものではなく、二又の大きな道具であると主張している。

資料2: ティニー・デュシャンからの手紙

(1975 年1月 8 日、東野芳明宛)



〔和訳〕

東野へ

新年の始まりに当たり、皆様のご多幸を心よりお祈り申し上げます、とくにあなたの愛すべき子に。

あなたの最初の「芸術作品」をありがとうございます！魅力的なこと！

もちろん、あなたのプロジェクトは覚えています！どうなっていますか？

来年、ここパリでマルセルの展覧会があるかもしれないことはご存知ですか？パリで建設中の新しいアートセンター（ボーブール）で、その館長はポントゥス・フルテンなのです。彼はマルセルの展覧会の開催を望んでいる人物なのです。

あなたはいつ来ますか？娘さんがいるから、昔のように旅行ができないのでしょうか。

ジャッキーより愛をこめて、私からも。

ティニー

東野芳明旧蔵マルセル・デュシャン関連書籍

	登録番号	著者/監修・編者	書名	出版社	出版年	※
1	H4-020	Katharine Kuh	The Artist's Voice: Talks with Seventeenth Artisys	Harper & Row, New York	1960-1962	20
2	H4-108	Herbert Read	A Concise History of Modern Painting	Thames and Hudson, London	1959	232
3	H5-047	Pontus Hultén and Paul Matisse	Marcel Duchamp: Notes	Centre National D'Art et de Culture Georges Pompidou	1980	
4	H5-077	Richard S. Field	Jasper Johns: Prints 1960-1970	Philadelphia Museum of Art	1970	220
5	H5-142	Raymond Roussel	Impressions of Africa	University of California Press, Berkeley	1967	200
6	H5-155	Georges-Emmanuel Clancier	De Rimbaud au Surréalisme: Panorama Critique	Pierre Seghers, Paris	1955	226
7	H6-001	***	L'ARC 59: Marcel Duchamp	L'ARC	1974	79
8	H6-040-2	***	Art and Literature 3	S.E.L.A.	1964	88
9	H6-045	Frank Stauffacher	Art in Cinema	San Francisco Museum of Art	1947	155
10	H6-047	***	Art International vol.7, no.10	James Fitzsimmons, Lugano	1964	95
11	H6-065	Jean-François Lyotard	Duchamp's TRANS/formers	The Lapis Press, Venice	1990	
12	H6-130	Robert Motherwell	The Dada Painters and Poets: An Anthology	Wittenborn, Schultz, Inc., New York	1951	143
13	H6-132	William S. Rubin	Dada, Surrealism and Their Heritage	The Museum of Modern Art, New York	1968	145
14	H6-152	Achille Bonito Oliva	Vita di Marcel Duchamp	Massi Marani	1976	
15	H6-153	Robert Lebel	Marcel Duchamp	Pierre Belfond, Paris	1985	
16	H6-154	Robert Lebel	Marcel Duchamp	Paragrophic Books, New York	1959	
17	H6-155	Alexandrian	Marcel Duchamp	Flammarion, Paris	1976	
18	H6-156	William A. Comfield	Marcel Duchamp: Fountain	Houston Fine Art Press	1989	
19	H6-157	Joseph Masheck	Marcel Duchamp in Perspective	Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, N.J.	1975	
20	H6-158	Walter Hopps, Ulf Linde and Arturo Schwarz	Marcel Duchamp: Ready-mades, etc. (1913-1964)	Le Terrain Vague, Paris	1964	51
21	H6-159	Marcel Duchamp	Duchamp du Signe	Flammarion, Paris	1975	
22	H6-160	George Heard Hamilton	Marcel Duchamp: from the Green Box	The Readymade Press, New Haven	1957	7
23	H6-161	Arturo Schwarz	Marcel Duchamp 66 Creative Years: From The First Paiting to the Last Drawing/Over 260 Items	Eric Losfeld, Paris	1972?	
24	H6-162	Octavio Paz	Marcel Duchamp or The Castle of Purity	Cape Goliard Press, London	1970	56
25	H6-163	Jean Clair	Marcel Duchamp ou le Grand Fictif	Galilée, Paris	1975	47
26	H6-164	Jean Clair	Marcel Duchamp: tradition de la rupture ou rupture de la tradition?	Union Générale d'Éditions	1979	
27	H6-165	Jean-Christophe Bailly	Marcel Duchamp	Fernand Hazan	1984	
28	H6-166	***	Duchamp	Fundació Joan Miró	1984	
29	H6-167	Alice Goldfarb Marquis	Marcel Duchamp: Eros, c'est la vie: a Biography	Whistone Publishing Co., New York	1981	
30	H6-168	Jean Clair	Duchamp et la photographie	Chêne, Paris	1977	
31	H6-169	John Golding	Duchamp: The Bride Stripped Bare by Her Bachelors, Even	Viking Press, New York	1973	49
32	H6-170	***	The Almost Complete Works of Marcel Duchamp	Arts Council of Great Britain, London	1966	63
33	H6-171	Gianfranco Baruchello and Henry Martin	Why Duchamp:an: an essay on aesthetic impact	McPherson, New Paltz	1985	
34	H6-172	Pierre Cabanne	Les 3 Duchamp:Jacques Villon, Raymond Duchamp-Villon, Marcel Duchamp	Editions Ides et Calendes, Neuchâtel	1975	
35	H6-173-1	Jean-Paul Thenot	Cent Lectures de Marcel Duchamp	Yellow Now, Crisnée	1978	
36	H6-173-2	Jean-Paul Thenot	Cent Lectures de Marcel Duchamp	Yellow Now, Crisnée	1978	
37	H6-175	Pierre Cabanne	Entretiens avec Marcel Duchamp	Éditions Pierre Belfond, Paris	1967	17
38	H6-176	Pierre Cabanne	Dialogues with MarcelDuchamp	Viking Press, New York	1971	17
39	H6-177	Calvin Tomkins and the Editors of Time-Life Books	The World of Marcel Duchamp, 1887-	Time Inc, New York	1966	59
40	H6-178	Robert Lebel	Marcel Duchamp: Von der Erscheinung zur Konzeption	Verlag M.DuMont Schauberg	1962/1972	
41	H6-179	Michel Carrouges	Les machines célibataires	Chêne, Paris	1976	
42	H6-180	Achille Bonito Oliva	La delicata scacchiera. Marcel Duchamp, 1902/1968	Centro Di, Firenze	1973	
43	H6-181	Robert Lebel	La Double Vue: suivi de L'inventeur du Temps Gratuit	Le Soleil Noir, Paris	1964	230
44	H6-182-1	J & J	Plan pour ecrire une vie de Marcel Duchamp	Centre National d'arte de Culture Georges Pompidou	1977	
45	H6-182-2	J & J	Plan pour ecrire une vie de Marcel Duchamp	Centre National d'arte de Culture Georges Pompidou	1977	
46	H6-183	Jennifer Gough-Cooper	La Vie Illustrée de Marcel Duchamp	Centre National d'arte de Culture Georges Pompidou	1977	
47	H6-184	Jean-François Lyotard	Les transformateurs duchamp	Éditions Galilée	1977	
48	H6-186	Jean Suquet	Miroir de la Mariée	Flammarion, Paris	1974	54
49	H6-188	Marcel Duchamp	The Bride Stripped Bare By Her Bachelors, Even. A typographic version by Richard Hamilton of Marcel Duchamp's Green Box	George Wittenborn, Inc., New York	1960	9
50	H6-190	***	The Large Glass and Related Works	Galleria Schwarz, Milano	1967	
51	H6-193-1	Anne d'Harnoncourt	Etant Donnés: 1° la chute d'eau 2° le gaz d'éclairage: Reflections on a New Work by Marcel Duchamp	Philadelphia Museum of Art	1987	
52	H6-193-2	Anne d'Harnoncourt	Etant Donnés: 1° la chute d'eau 2° le gaz d'éclairage: Reflections on a New Work by Marcel Duchamp	Philadelphia Museum of Art	1987	
53	H6-194	Luca Maria Patella	Den & Duch: dis-enamed	Libri di AEIUO, Roma	1988	
54	H6-195	William C. Seitz	The Art of Assemblage	The Museum of Modern Art, New York	1961	144
55	H6-196	***	Arensberg Collection	Philadelphia Museum of Art	1954	149

56	H6-197	***	Junggesellenmaschinen/Les Machines Célibataires	Kunsthalle, Bern	1975	228
57	H6-251	Michel Foucault	Raymond Roussel	Gallimard, Paris	1963	197
58	H7-017	C.G. Jung	The Collected Works of C.G. Jung: Vol 12: Psychology and Alchemy	Princeton University Press	1968	212
59	H7-129	K.G. Pontus Hultén	The Machine as Seen at the End of the Mechanical Age	The Museum of Modern Art, New York	1968	147
60	H7-162	Marc Le Bot	Francis Picabia et la crise des valeurs figuratives 1900-1925	Éditions Klincksieck, Paris	1968	194
61	H7-165	William A. Camfield	Francis Picabia	The Solomon R. Guggenheim Museum, New York	1970	195
62	H7-185	Aline B. Saarinen	The Proud Possessors: The lives, times and tastes of some adventurous American art collectors	Random House, New York	1958	153
63	H7-214	Leonardo Sciascia	Actes relatifs à la mort de Raymond Roussel	L'Herne, Paris	1972	204
64	H7-270	Robert Lebel	Sur Marcel Duchamp	Editions Trianon, Paris	1959	44
65	H22-002	Shigeko Kubota	Marcel Duchamp and John Cage	Takeyoshi Miyazawa	**	52
66	H22-036	***	Marcel Duchamp: abécédaire	Musée National d'Art Moderne, Centre National d'Art et de Culture Georges Pompidou, Paris	1977	
67	H22-037	Jean Clair	Marcel Duchamp : Retrospective	Centre National de Documentation Pédagogique, Paris	1976	
68	H22-038	Jacques B. Brunius	En Marge du Cinema Français Couverture de Marcel Duchamp	Arcanes, Paris	1954	
69	H22-039	William. A. Camfield and Jean-Hubert Martin	Tabu Dada: Jean Crotti & Suzanne Duchamp 1915-1922	Kunsthalle, Bern	1983	
70	H22-077	中原佑介	『デュシャン』〈ファブリ世界名画全集〉	平凡社	1972	182
71	H22-084	***	art press 1 décembre/janvier 73	art press	1973	105
72	H22-086	Serge Stauffer	Marcel Duchamp Die Schriften	Regenbogen-Verlag, Zürich	1981	
73	H22-087	Arturo Schwarz	The Complete Works Of Marcel Duchamp	Harry N. Abrams, Inc., New York	**	46
74	H22-089	Marcel Duchamp	Étant Donnés	Philadelphia Museum of Art	1987	
75	H22-090	Marcel Duchamp	Étant Donnés	Philadelphia Museum of Art	**	
76	H22-132	William A. Camfield	Marcel Duchamp: Fountain (Copied)	The Menil Foundation, Houston	1988	
77	H22-216	Julien Levy	Surrealisme	Arno Press, New York	1968	139
78	H22-217	Hugh Edwards	Surrealism & Its Affinities: The Mary Reynolds Collection	The Art Institute of Chicago	1956	
79	H22-234	M・デュシャン／P・カバンヌ	デュシャンの世界	朝日出版社	1978	
80	H22-235	M・デュシャン／P・カバンヌ	デュシャンの世界	朝日出版社	1978	
81	H22-236	オクタビオ・パス	マルセル・デュシャン論	白馬書房	1991	
82	H22-237	宇佐美圭司	デュシャン	岩波書店	1984	
83	H22-238	中原佑介	新潮美術文庫 49 デュシャン	新潮社	1976	192
84	H22-239	***	Marcel Duchamp: Works from the John and Mable Ringling Museum of Art Collection	The John and Mable Ringling Museum of Art, Florida	1984	
85	H22-240	東野芳明	マルセル・デュシャン	美術出版社	1977	
86	H22-241	マルセル・デュシャン	表象の美学	牧神社	1977	
87	H22-242	***	エピステーメー1977年 11月号「マルセル・デュシャン」	朝日出版社	1977	
88	H22-243	***	Sites 19	Sites, New York	1987	
89	H22-244	カルヴァン・トムキンズ	花嫁と独身者たち／現代芸術五人の巨匠	美術出版社	1972	
90	H22-245	カルヴァン・トムキンズ	花嫁と独身者たち／現代芸術五人の巨匠	美術出版社	1972	
91	H22-246	ジョン・ゴールディング	マルセル・デュシャン 彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも	みずす書房	1981	
92	H22-247	東野芳明	第7回オマーージュ瀧口修造 マルセル・デュシャンと瀧口修造	佐谷画廊	1987	
93	H22-248	***	VH 101 No.6	Editions Essellier	1972	86
94	H22-249	***	VH 101 No.3	Editions Essellier	1970	
95	H22-251	東野芳明	マルセル・デュシャン エッチングシリーズ:《恋人たち》《大ガラス》	M. gallery	1987	
96	H22-252	***	みずゑ 1977年 6月号 マルセル・デュシャン	美術出版社	1977	
97	H22-254	***	Art in America: July-August 1969	**	1969	23,25
98	H22-255	***	L'Oeil No.183	**	1970	103
99	H22-256	Richard Hamilton	The Bride Stripped Bare By Her Bachelors, Even, Again	The Department of Fine Art, University of New Castle upon Tyne	1966	133
100	H22-258	東野芳明	マルセル・デュシャン小品展	モノ アートギャラリー	1980	
101	H22-259	***	マルセル・デュシャン展	高輪美術館/西武美術館	1981	
102	H22-260	***	Opus international 49/ Duchamp et Apres	**	1974	
103	H22-302	Alain Jouffroy	Une révolution du regard	Gallimard, Paris	1964	137
104	H22-346	André Breton	Le Surréalisme et la Peinture	Gallimard, Paris	1965	123
105	H22-502	***	Collection of the Société Anonyme: Museum of Modern Art 1920(copied)	Associates in Fine Arts at Yale University	1950	6
106	H22-557	***	The Blind Man / May 1917, No2(copied)	The Blind Man's Ball	1917	71
107	H22-593	André Breton	Les Surréalisme, même 2	Jean-Jacques Pauvert	1957	28
108	H22-594	André Breton	Les Surréalisme, même 3	Jean-Jacques Pauvert	1957	101
109	H22-609	André Breton	Anthologie de L'humour noir	Éditions du Sagittaire, Paris	1950	122
110	H22-617	瀧口修造	マルセル・デュシャン語録(コピー)	東京 ローズ・セラヴィ	1968	
111	H22-620	Marcel Duchamp	Arp	Galleria Schwarz, Milano	1965	

※東野芳明著『マルセル・デュシャン』掲載 文献目録番号

執筆要項

- ・各年度3件程度の論文等(研究論文、作品紹介、講演録等)を掲載して発行する。
- ・執筆は富山県美術館学芸員(常勤・嘱託問わない)が行う。
- ・掲載論文は、広く県民や美術館関係者に対して、富山県美術館のコレクション作品の価値や意義、学芸員の研究成果及び教育普及活動の成果を公開・発信することを目的とする内容とする。

令和2年度 富山県美術館紀要

編集・発行

富山県美術館

〒930-0806 富山県富山市木場町3-20

TEL: 076-431-2711 FAX: 076-431-2712

発行日

2021年3月31日

©Toyama Prefectural Museum of Art & Design

掲載図版クレジット

p. 2 © ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2021, Chagall® G2473